
(現在、改稿中)世界の全ては神すらも知らない

雷龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

（現在、改稿中）世界の全ては神すらも知らない

【Nコード】

N2744T

【作者名】

雷龍

【あらすじ】

現在、改稿中です。

俺は龍谷 真15歳最近までは、普通の中学生だった
それが、突然白髪の竜の美女が訪ねてきて貴方は神で、竜で
記憶を失っていて、私の夫だと！！！？
そんな感じの神様が頑張る話です。
あと、R15は一応の保険です

現在、序盤です。

人物紹介（前書き）

これは、世界の全ては神すらも知らないの人物紹介です。
ネタバレの恐れがあります。注意してご覧ください。
てかネタバレそのもの。

人物紹介

-----人物紹介-----

龍谷 真（15歳？・男）《ただに しん》
なんやかんやと、凄い身体能力と能力を持つ中学生。孤児で、親はいない。

伯竜市立伯竜中学校の三年生

グレナルド・フェル・クレイフィールド（クレルド）・ゼロニウス・ヴァンフォート・ダーディング（不明・男）

現存する世界の約4分の3を創造した、創造神。現在は第4706世界に出張しているはずだが…？

全世界管理神連合理事長兼議長。神階級、最高位第三十三位神。最強の神である、四強王の一角”虚王”と祖龍神帝と天雷帝の呼び名を持つ。

別名、血塗れの創造主。

…分かりやすく、どれぐらい強いかというと、クレルドにはなんの予備動作もなしにプラズマを高圧縮した電撃を放つことができる攻撃法があるのだが、それを本気で二、三発放てば小世界程度（下から数えて二番目の世界）ならば軽く跡形もなく消し去ることができる。

因みに、全ての世界（神帝世界を除く）を消し去るとするならば、僅か”87秒”の準備時間で消し去ることができる。

ただし、神帝世界（最高位の世界）を加えた場合は準備時間が”2時間9分38秒”と増大する。

グレナルド・フェル・フェイラースト（フェイス）・ゼロフィルス・ヴァンフォート・ダーディング（不明・女）

最高神祖龍神帝の妻。かなりのトラブルメーカーであり、夫の祖龍神帝でも手を焼いている。祖龍神帝代行の一人。

神階級、第三十二位神。雷帝の呼び名を持つ。

ラーズセンド中央特別裁判所 副裁判長

白鞘 劉輔（15歳？・男）《しらさや りゅうすけ》

気味悪がられている、真の唯一の親友。クラスのムードメーカー。どこか達観した言い方をするときがある。

伯竜市立伯竜中学校の三年生

ホルカディア・イル・バーティアス（バース）・ハルベルウス・ヴァンフォート・ダーディング（不明・男）

言葉遣いが少し乱暴な神。祖龍神帝代行の一人。

神階級、第三十二位神。水電帝の呼び名を持つ。

別名、冷酷なる冰山

ラーズセンド中央大学 理事長、

ラーズセンド中央大学病院 理事長

ホルカディア・イル・ラルフォート（ラルト）・ハルベムールス・ヴァンフォート・ダーディング（不明・女）

夫と同じく少し乱暴な言葉遣いだが、聡明な美女。祖龍神帝代行の一人。

神階級、第三十二位神。氷帝の呼び名を持つ。

ラーズセンド中央大学病院 院長

霊法院 京枷（不明・女）《れいほういん きょうか》

いつも冷静沈着な、外見は三十代半ばの女性神。

神階級、最高位第三十三位神。最強の神である、四強王の一角”
靈王”と靈帝の呼び名を持つ。

別名、全ての監視者。

ラーズセンド中央情報庁 大情報総統長官

ラーズセンド中央情報庁 ”鷹ノ巣”総隊長

ラーズセンド中央特別裁判所 裁判長

ラスナムス・ユラルテ・タルディアート・ベネディクト（不明・男）
古風なしゃべり方をする、外見は六十代後半の男性神。表には出さないが、自分以外の八神帝やその他の神ほぼ全員にたいして、かなりの好印象を持っている。

神階級、最高位第三十三位神。最強の神である、四強王の一角”
平王”と時空帝の呼び名を持つ。

別名、万能の策師。

ラーズセンド中央監察庁 大統括監察総監

白鞘 由佳里（504兆98億1300万7162歳・女）《しら
さや ゆかり》

”最近”、神となったが實力はかなりのもの。焰風帝の妻。

神階級、第三十一位神。炎帝の呼び名を持つ。

ラーズセンド中央軍 元帥

ソナカムア・ロイド・カムート（不明・女）

か弱い外見だが、それに似合わない膨大な力を持つ。
気が強いが、実はツンデレ。

神階級、第三十位神。四高神の一人。東神の呼び名を持つ。

ラーズセンド中央監察庁 中央指令室副指令室長

ガンテンドルフ・リルフォート（不明・男）

かなりの威厳を持つ容姿をしている。かなりの猛者。

それで脳筋野郎だが、それなりの分別はある。

神階級、第三十一位神。四高神の一人。西神の呼び名を持つ。
ラーズセンド中央軍 陸軍（二級）大将

九頭龍 宗津（不明・男）《くずりゆう そうづ》

ぱつと身は冴えない老人。よく見ると、目に強い意思を持っている。でも気は弱いからあまり本領を發揮できない。

神階級、第三十一位神。四高神の一人。南神の呼び名を持つ。
ラーズセンド中央監察庁 神登録局局长

アスキューム・フィル・トルドチイス・ヤエキルフ（不明・男）
へらへらした若者にも見える。だが、実はかなりの実力を持っている。

かなりの腹黒ダヌキで、一度東神と南神を嵌めた。

神階級、第三十位神。四高神の一人。北神の呼び名を持つ。
ラーズセンド中央軍 統括軍（一級）大将

ノルディーク・グリマルデイ・ノークベス・ヴァンフォート・マチ
ート

少し力が減ったが、まだまだ現役の元気な人。

案外、というか凄いタヌキ爺。ヤエキルフと馬があう。

神階級、第三十一位神。

ラーズセンド中央軍 統括軍最高大将、

ラーズセンド中央軍 元帥

野々宮 英夫

リルフォートと同じような体つきをしているが、

性格や戦略は正反対。此方は、緻密に作戦をたてて攻めてくる。でも、馬があうのか親友。

神階級、第三十一位神。

ラーズセンド中央軍 陸軍 最高大将

物語が進むごとに、随時更新していきます。

人物紹介（後書き）

本編が進むと共に随時更新していきます。
変な所があれば、どうぞ言ってやって下さい。
喜んで訂正します（笑）。

6 / 1 1 要請により、振り仮名追加

6 / 2 5 本編更新につき、編集

7 / 2 少々名前変更、及び編集

8 / 2 5 編集

第零話（前書き）

一度退会しましたが、戻ってきました。

ですが、最近は全く書いていなかったのでは初投稿です（笑）
我慢して見てやってください（笑）

第零話

第零話

…世界は無から始まり… 動き出す… 何が起ころかは…
たとえ神でもわからない…

うーす、俺の名前は、白鞘 劉輔

俺は俗に言う神ってやつ。それも、ナンバー2。どうだ、凄いだろ

(笑)

つまり、俺ってスゲー強い(笑)

でもなあ、いかに天才で容姿端麗で…(略)

…な俺でも全知全能ではないんだよね。

…おい！その剣なんだ！やめろって！…あつ、ちよ止めて…！

…ゲフンゲフン…それを決定付けたある出来事を話すぞ…

それは、1000無量大数の1000無量大数乗と9不可思議とんで7亥9023京681兆3716億4805万19年生きてきた俺が知ってる最大の出来事だ。

確か、最初の予兆はある日の夜に起きたんだよなあ…。

第一話

第一話

その夜、全世界を統べる祖龍神帝が直接管理している、全世界一安
全な世界、ラーズセンドのある暗がりである小さな会合が行われて
いた…

「…それで、あの方たちの配属先は。」

「第4607世界、あちらでは地球と言う惑星の日本国の大東都、
伯竜市の伯竜中学校だ」

「そうねえ…これである老害たちも終わりだわ」

「…そう言うな、あの方たちは今まで頑張ってきた。そろそろ潮時
と言っただけだ。次は我々が全世界を統べる…」

「そうだ、あの者たちは長くあの座に居すぎた。そろそろ、消えて
もらわなくては困る」

「…そうね、じゃあ十五年後にね」

「…ああ」「…そうだな」

「…「では…」」「」

ヒュン…

小さな音になったあと、そこにはまるで今まで三人ものヒトが居な
かったかのように、ただ暗がりだけが佇んでいた…

俺は、龍谷 真 伯竜中学校三年の15歳 本来ならもう帰ってる
放課後に学校内で現在絶賛逃走中な可哀想な子ですよ。

えっ、逃げてる理由？後ろのうるさいバカどもとの会話を聞いたら

わかるよ

「おいこら！待てよ！金貸せよ！」

「そうだ！金だけ貸しゃーいいんだよ！」

「無理！お前らに貸す金はねえ！」

「何だところら！」

…わかったかな？今俺は何か勝手にぶつかってきた奴等に金を取られないように逃げてるんだよ。

あー、だりい…久しぶりに”あれ”使おうかな…

まずは、校舎の角を曲がってと…

「ひよいとな」

ん？なにしたのかって？跳んだんだよ地面から四階建ての校舎の屋上まで。

「おい！どこ行つた?!」

「探すぞ！」

ダダダダ……

「ふう、やつと行つた行つた…しっかし、なんでこんな風な完全人外の身体を持つてるんかなあ…俺は…」

そうなのだ、なぜか俺は完全に人外な身体能力を持っているのだ。身体能力以外にも、霊と話せたりする能力とか、植物と話せたりする能力とか、

終いには、雷とかも操れたり。

もう嫌になつてくるんだよ、これ。親がいれば、何か分かるかも知れないが

生憎と俺は孤児。調べようと病院に行つたとしても精神病院に強制的に送られるのは容易に想像がつく。

「はあ…」

溜め息をつきながら、階段を降りて教室に戻っていく俺の遙か後ろに、

巨大な姿があるのに俺は全く気付かなかつた…

「やっと見つけた……クレルド……」
そう、少しエコーがかかったこの言葉にも全く気付かなかったのだ……

「こらっ！！！！何で屋上に居た！？龍谷！！答える！」

「あー、ハイハイ」

この騒がしいのは、保険医の長田つつーおっさん。何で保険医何だ？と思うほどの熱血漢で、筋肉野郎。いつそのこと、体育教師に転職しろよ。

「ハイハイとはなんだ！！！！ハイハイとは！！！！はいは一回でいい！！！！」

「ハイハイ、わかったから」

あ、キレた

「いい加減にしろ！！！！このあと直ぐ生徒指導室に来い！！！！」

「……了解しました。」

行く気なんかあるかこの能無しキン マン

「おいおい、長田キレさせて良いのか？」

こうたずねて来たのは、人外の能力のせいで怖がられている

俺の唯一の心からの親友、白鞘 劉輔だ。さっきのバカどもは知らなかったみたいだな。

「別にいいだろ、ああいう奴は気持ち悪いから嫌なんだよ。それに、意外にほつといたら元に戻るもんだ。」

「お前らしい理由だな（笑）」

「そうか（笑）？」

そう笑いながら、話していると、まるで爆弾が近くで爆発したような音が轟いた

「なんだ!？」

その音を聞いて言うと、

「…真、一緒に来い」

そう言うと、劉輔は何時ものバカみたいな顔ではなく、

かなり真剣な顔で、でも少しだけ困ったような顔をしてそう言うと、
爆発音らしきものが聞こえた方へ俺の手を掴んで、走り出した。

「お、おい!どうするつもりだ!！」

そう言うても、劉輔は無言だった

あんなに何時もバカ騒ぎしている劉輔が無言と言うことに、少しだけ、怖くなった…

第二話

第二話

爆発音がした方に行くと、校舎の中庭側がかなり酷く損傷していた。「爆弾でも爆発したのか…?」
そう思うが、それにしても焦げ目がないし、匂いもないと思うていると、劉輔に中庭に連れ出された。
そこには、まるで神がいるようだった。

中庭には、竜がいた。

俗に言う西洋竜で、全身が純白で、翼に金と黒の色の模様があった。角は左右に一本づつ。眼の色は、周りが漆黒で、中心は燃え盛るような赤。

体長が13〜17メートル位だろうか?。

大口を開けて固まっていると、その竜の周りが薄く光だした。

暫くすると、白い色の髪をした絶世の美女が立っていた。

…腕や足などの美しさSSランク。

胸はてでおおっても余るほど。

顔はもう言うまでもないが、これ以上あるかと言うほどの美人。

…うん、文句なしのオールグリーン。

一瞬で、俺はそうこの美女を判断した。

…が、その竜かもしれない美人になぜ俺は抱き締められているのか?

…全くわからないが、暫くはこの感触を思う存分堪能しよう。

因みに、どうしてこうなったかは、少しばかり時間と世界を移動しないといけない…

…一時間前…

第一世界・ラーズセント

ここ、ラーズセントでは短期の出張によって、最高神である祖龍神帝が不在である。

さらに、祖龍神帝には多数の幹部がついていったため、現在は祖龍神帝の妻である、

雷帝グレナルド・フェル・フェイラースト（フェイス）・ゼロフィルス・ヴァンフォート・ダーディング等がその業務を全て行っている。

…ラーズセント 中央零区 帝賓館 祖龍神帝・天雷帝執務室…

「あゝ、やる気が起きないわ〜」

そう言ったのは、最高神の妻であるグレナルド・フェル・フェイスである。

「そう言うな。此方も辛いんだよ」

「そうよ！全員辛いんだから、我慢してよ！フェイス！」

それに答えたのは、神の最高位である八帝神の1人、

水電帝ホルカディア・イル・バーティアス（バース）・ハルベルウス・ヴァンフォート・ダーディングと、その妻、

同じく八帝神、氷帝ホルカディア・イル・ラルフォート（ラルト）・ハルベムールス・ヴァンフォート・ダーディングだ

「いや、だつてさー。仕事つまないし、クレルドには会えないし

…」

「…我慢してくれ（よ）！」

「だつて〜……」

「だつてじゃない！仕方ないだろうが、あの世界の者たちに我々の

存在を示すまで、クレルドたちには会えないのだから」

そう、祖龍神帝と多数の幹部の任務とは、神の存在を知らない第4
607世界の者たちに、神の存在を示すこと…

それが終わるまで、混乱を避けるために部外者は神すらでも進入禁
止となっているのだ

「でも、かかりすぎじゃない？15年は？何かあったのかしらね？」

「確かにそうだな。いままでののは、最短で一年、最長で十一年だか
らな。だが問題は無いだろうクレルドがいれば…」

「はっ、もしかしてクレルドが危ないんじゃない？そうだったら大変！
直ぐに行かなくちゃ！！」

そう言うと、フェイスは異世界転移術を使って、一瞬で行ってしま
った。

「おい！ちよつと待て……。ち！、行ってしまったぞ！」

「と、取り敢えず、残りの八帝を集めてフェイスを追えるようにし
ましょう！」

「わかった！収集をかけておいてくれ！俺は軍部に連絡するから！」

「わかったわ！」

そうすると、二人は執務室からいなくなった。

この事件が、全ての始まりだと彼らが知るのはかなり後の事だ…

そう、この時全てを知っていたのは、たった”四人”だけだったの
だから…

第二話（後書き）

水電帝は、（スイヒョウテイ）と読みます。

因みに、神様は殆どが本当の姿は竜、もしくは龍です。

一応連絡（笑）

第三話

第三話

フェイスはラーズセンドの騒ぎなんか露知らず、地球に来ていた

「さあ、クレルドはどこにいるの!？」

そう言うなり、フェイスは元の姿である純白の竜に戻り、広域探査魔法を自信の周りに発生させた。

すると、フェイスの上下左右前後に直径三メートルほどの魔法陣が現れた。

この広域探査魔法は、神のみが使える”神術”と言う魔法の一種であり、

消費するのは魔力ではなく、”神力”と言う神のみが持つ力である。因みに、大体はほぼ誤差なく目標を探知できる。

「クレルドが居るのは、アフリカ大陸と言うところかしら？」

……使うヒトによるが……

それから一時間ほど、アフリカから北極まで探してやっと日本の伯竜市までやって来た。

「ここら辺よね?どこ?！クレルド?!」

彼女はそう言っているのだが、周りからしたらただの咆哮であり、警察や役所に電話が殺到したのは、言うまでもない……

暫く雲の間を飛行していると、前方に反応があった。

「クレルド!?クレル、ド…?」

そこに居たのは、間違いなく気配や、魔力などが彼女の夫のものをした、黒髪の青年が走っている姿だった。

「な、何で姿が違うの?別にすがたを変えなくても、髪色だけをを

変えればいいって言ったのに… もしかして別人？」

そう疑問に思っている、その青年は、いきなりかなりの高さを飛んで屋上にまで移動した。

それを見て、

「いや、やっぱりクレルドだわ。あんなことをクレルド以外ができるはずがない… やっと見つけた…クレルド…」

そう言うなり、彼女は、大急ぎでそこに向かって行った…

彼女は、校舎に囲まれた場所に降り立とうとしたが、

そこには、変わった木があって、降り立つことができなかった。

その木のそばには、こう書かれた立て札があった。

世にも珍しい、巨木。

木の幹に女性的なこぶがついており、様々な学者が調べているが、何故そうなっているかはわかっていない。

PS：男性の学者があり得ないほど多い。

…彼女は取り敢えず、消失魔法でこの木を消した。

すると、消失魔法の反動で辺りが吹き飛んだが、放課後なので人は近くにおらず、怪我人は居なかった。

彼女が地面に降り立つとほぼ同時に、夫と白靴が建物の中から出てきたのを見て、彼女は取り敢えず人に戻り…

「クレルド！会いたかった！何でそんな姿なのかは知らないけれど、無事で良かった〜！」

と言いながら、抱きついた。

…暫くたって、何も反応を示さない夫を不審に思い、

「どうかした？」

と、彼女は尋ねた。

この質問が、重要な役割を持つことに全く気付かずに返ってきた答えは、彼女が予期できない答えだった

「…あのー、すみません。貴方は誰ですか？」

「え………」

ヒュー…

何者も動かない中で、風だけがただ吹いていた…

それを静かに見ていた者のことを知るのも、”風”だけだった…

第三話（後書き）

はい、懺悔の時間です。

ぐだぐだです。はい。

なんかいろいろ変な設定作っちゃったし…

人物も次回から一気に増えるので、人物説明とか、地名説明とかのページを作ろうかと思ってます。

運営のほうから、歌詞の無断使用を指摘されたため、全く異なった話に変えさせていただきました。

本編には特に影響はありません。

ご迷惑をおかけしました。

…誰か俺にもつと文才を！

第四話

第四話

フェイスが、祖龍神帝を追いかけて行ったことにより、ラーズセンドでは大混乱が起こっていた。

まず、軍部の大將會議や、全世界管理神連合の理事会、及び議会、全管理神集会在緊急で行われた。

それにより、仮ではあるが最高位の神となっていた者が居なくなり、更にはその神が向かった世界のバランスが揺らぐかもしれないと言う大問題が明るみになり、

ラーズセンド全土で大混乱が起こっていたのだった。

更には、丁度この日にラーズセンド政府の内閣建て直しが図られていたことも、更に混乱に拍車をかけた。

最終的には、この混乱を静めるために、全世界ではほぼ絶対的な影響力と権力を持つ八帝神会議と、

その次席の四高神会議が合同で開かれるまでになった。

- - ラーズセンド 中央零区 帝賓館地下26階 八帝神専用会議室 - -

広さが90畳ほどもあるこの広く少し薄暗い会議室に、祖龍神帝（天雷帝）とそれに同行している焰風帝と雷帝以外の五人の八帝神と四人の四高神が揃っていた。

「最初に断っておくが、雷帝不在のため俺、水電帝が議長を勤める。異論は認めない。…では、会議を始めるにあたって説明しておきこ」とがひとつある。現在、天雷帝が不在のため、雷帝がその業務を行っていたが彼女はそれを放棄し、干渉が禁止されている、天雷帝ら

の元に向かったと思われる。「水電帝”ホルカディア・イル・バスがそう言うなり、周りからは驚きの声が上がった。

「それはやはり本当なのですね？」

こう言ったのは、”炎帝”白鞘 由佳里だ

「ええ、本当よ。確かに私たちの目の前で天雷帝の元に向かうことを仄めかして、異世界転移術を行使し、消えたわ……」

それに答えるは、”氷帝”ホルカディア・イル・ラルト

「…私たちとは？」

尋ねたのは、”霊帝”霊法院 京枷だ

「私と、水電帝よ。書類に印を押しているときに起きたの」と氷帝「…二人も八神帝の方がいたと言うのに、止められなかったのですかな？」

それに対しこう非難するのは、”時空帝”ラスナムス・ユラルテ・タルディアート・ベネディクトだ

「無駄だな、一瞬で術を使かった。いくら我々でも、あれは止めることはできない。」こう言ったのは、水電帝だ

八神帝の五人はこう普通に会話をしているが、四高神はたまったものではない。

”東神”ソナカムア・ロイド・カムートは冷や汗を流して、

”西神”ガントンドルフ・リルフオートと”南神”九頭龍 宗津は思案顔で居心地悪そうにして、

”北神”アスキューム・フィル・トルドチイス・ヤエキルフは感慨深そうにして、

それぞれ四人は四者四様のよそおいを見せて豪奢な椅子に座っていた。

「取り敢えず、今回は言い争うことが目的じゃあない。雷帝を連れ戻すために、時間を止めて天雷帝らがいる第4607世界に侵入することを許可するか。もし、許可すると言うのなら、誰が向かうかを決めることだ」

議論が泥沼化するのを避けるため、水電帝はこう言った

すると、霊帝が

「…そうですね…。取り敢えずは、言い争いはやめて決議を早く行いましょう。事態は逼迫していますから。まず、私は侵入には賛成です。」と言うのを皮切りに、

「…確かにそうだな、無駄な争いは避けようか。…我は向かうのに賛成だ」

「そうですね。私も賛成です」

「私も賛成よ」

と意見を表明し決議は一気に進んだ。

因みに、上から時空帝、炎帝、氷帝でぬある。

「俺も賛成だが…四高神たちはどうだ？」

水電帝が尋ねると、

東神、南神は「わ、私は賛成です！」

北神は「まあ、いいんじゃないの？」

西神は「…賛成だ」

とそれぞれ意見を言った。

「では、全会一致で第4706世界に侵入することを許可することに決定する。では、次は誰をむかわすかだが…」

水電帝はそこまで言うと、言葉を濁した…

何故なら、フェイスは深く考えずに行動する節があるが、それでも雷帝であるため実力はお墨付きである。

簡単にはいかないのだ。

「では、陸軍と統括軍の最高大将を引き連れて私が行きます。夫のことも心配ですから」

炎帝がこう言うなり、時空帝が反対の意を表した。

「…それは駄目だ！それでは実力に差がありすぎる。せめて我か水電帝かがそれに同行しなくては…」

「確かにそれは言えているな。じゃあ、時空帝が同行してくれ。異論はあるか？皆？」

水電帝がこう言ったことに他の八人は異論はなかった。

「では、我々たちは直ぐに大将たちを収集して向かうとします」

「まあ頑張ってくれ」

時空帝の言葉に水電帝がこう返すと同時に時空帝と炎帝は消えた。

「じゃあ、閉会だ。では、解散」

水電帝が言つとその場にいた七人が忽然と消えた。そう、15年前の時と同じように…

- - 伯竜中学校、中庭 - -

「…あのー、すみません。貴方は誰ですか？」

「え……」

こう言ったきり、彼女はフリーズしてしまっていた。…因みに、俺もフリーズしている。胸に当たる二つの感触を堪能しながら。

「…おい、お前ら動けよちよつとは。」

劉輔（外野）が何か言っているが無視する。今の俺にはこの至福の感触は手放せない。もっと楽しみたいんだ、放っておいてくれ。

俺の切なる願いが通じたのか、劉輔は何も言わなくなった。

暫くは、抱き合っている俺と美女は全く動かず劉輔だけが苦笑しながら立っているという奇妙な光景があった。

第四話（後書き）

人物紹介作りました。
ネタバレを含みますので、注意して下さい。

閑話 - 長田の不運 - (前書き)

かなり下ネタな話です。

12歳以下は回れ右！

閑話 ・ 長田の不運 ・

閑話 ・ 長田の不運 ・

俺の名前は長田 惣次郎！

伯童中学校で保険医をやっている、ピチピチの三十二歳だ！

…え？三十二歳はピチピチじゃないし、その前にお前男たるだと？

…フッフ、実は俺は姿は男！心は乙女！の、れっきとした同性 者
だ！

健康診断の時とかに中学生の裸が見たくて見たくて、わざわざ伯童
中学校の保険医になったんだ！

…誰にいつてるんだろうな、俺…

ヤバイな、そろそろ末期か？

…まあ、取り敢えずこれは後で診察を受けるとして、放課後の”ミ・
マ・ワ・リ”に行くか…

（”ミ・マ・ワ・リ”とは、放課後にまだ残っている特定の”男子
”生徒に因縁をつけて、

生徒指導室でしっかり”愛の指導”をすることである。

因みに、校長と教頭はそれを正すために長田の家に押し掛けたが、
帰ってきたときには二人ともびくびくし腰を押さえていて、
いろいろと始めての事を経験した後だったという

それからは校長と教頭は何も言わなくなったらしい）

「さーて、今日は誰を指導（もとい調教）しようかなあゝ」

こう言っただけ歩いてみると、立ち入り禁止の屋上につながる階段から龍谷 真が降りてきた。

…超上玉発見

「こらっ！！！！何で屋上に居た！？龍谷！！答えろ！」

「あー、ハイハイ」

…ヤバイよヤバイよ！照れてるじゃん！（勘違い）
様子みるかな

「ハイハイとはなんだ！！！！ハイハイとは！！！！はいは一回でいい！！！！」

「ハイハイ、わかったから」

ヤバイ！絶対照れてる！照れて顔背けてるし！（鬱陶しいからよし！誘っぞ！

「いい加減にしろ！！！！このあと直ぐ生徒指導室に来い！！！！」

…了解しました。」

…ヤッホー！！！！キター！！！！

誘いに乗ってくれたし！ヤバイ！（凄く勘違い）

いろいろと用意しとかないと！（何の）

さて、そうと決まれば早く行かないと！

…その後…

伯竜中学校 生徒指導室

「……………何故来ない！？」

そこでは長田が調きゲフンゲフンY: 指導用の道具を後ろに山積みにして椅子に座っていた

「…そうか!! 照れてるからか! いや、準備のため(超変態的発言の為自主規制…)から遅いのか!？」

ドォー……バリーン……ガラガラガラ……

そんなどうでもいいことを言っていると、突然爆音が轟いた…

「な、なんだ!」

爆音が聞こえた方を窓から覗くが、そこには、

中庭を囲むように建っている口のような形をした校舎が、

後少し大きな衝撃を加えれば倒壊するような損傷が著しい状態で建っていた。

「あの様子だと中庭か! 俺が丹精をこめて育てた例の木は大丈夫か!？」

そう言うなり中庭に向かって走り出した。

今日は”ミ・マ・ワ・リ”の為に、長田以外の全教職員が全員もう帰っている

それ故に、今日放課後に学校で起きたことはたった一人で納めなくてはならないのだが、

長田はそれ相応の利益を得ているので、今までは満足していたが…

今日は状況が何時もと大きく違っていた

何故なら…

第五話（前書き）

ユニーク10000に、PV4000、本当にありがとうございます

！！！

これからも、「世界の全ては神すらも知らない」と
雷龍をよろしくお願いします！

第五話

第五話

「…で、この周辺にクレルド達はいるのかしら？」

「そうだろうな、ここを中心に神力が周りに満ちている」

「しかし、どうしてこんな場所にいるのか… 理解に苦しむのう…」

「…………… 我は少しだけなら予想だが… 理解できた…」

中庭で龍谷とフェイスが戯れている時、伯竜中学校の上方数百メー

トルではこのような会話が行われていた

初めに話していたのは、

”炎帝”白鞘由佳里、

次は”ラーズセンド世界軍 陸軍最高大将 陸軍最高総統括司令官

”野々宮英夫、

次に”ラーズセンド世界軍 統括軍最高大将 統括軍最高総統括司

令官”グリマルディ、

最後に”時空帝”ベネディクト

の四人だ。

「ほう…それはどういうことですか？偉大な偉大な万能の策師の異名を持つベネディクト大統領統括監察総監閣下？

ああ…それに、少しだけとはいえこの事を予想していたのであれば
同格として、

天雷帝に注意するべきではなかったのですかな？

場合によっては責任問題となりますよ？閣下？」

倒れていた

「げっ！何で長…」こいつは俺が安全な場所に運んでおく！フェイス！正気に戻ってクレルド…いや、真を守れ！

今そいつは一時的に記憶をなくしてる！”あれ”をかけてやれ！施行中は自己防衛ができないから守れ！早くしろよ、既に”干涉”し過ぎてる！”

…おい！何だよ！どういうことだ！？

記憶をなくしてるって何だよ！それに何でこいつの名前を知ってるんだよ！？”

長田を見て少し驚いた後、突然劉輔は顔中にまるで世界の終わりが来たかのような驚愕を貼り付けて、俺が話すのを劉輔が突然遮った

それにたいして俺は疑問を投げ掛けたが、しかし劉輔は答えずに長田を抱えて校舎の中に連れて行ってしまった…

すると、劉輔の言葉を聞いて、フェイスと言われた彼女は、放心状態から回復し俺に話しかけてきた

「クレル… あなた！少し痛いわよ！我慢してね！！」

いやいや今まで一回も会ったことも無いのにそんなもん、了承でき…ない…い…？

あれ、何か…意識が… ヤバい…立て…ない…

そうして、俺はまるで神に頭を垂れるように倒れ、意識を無くした…

イタイ イタイ イタイ イタイ イタイ

イタイ イタイ イタイ イタイ
イタイ イタイ イタイ イタイ
イタイ イタイ イタイ イタイ
イタイ イタイ イタイ イタイ
イタイ イタイ イタイ イタイ!!!

気絶した瞬間、俺の頭に”人間一人”では一生生きても得ることができない膨大なまでの、今まで完全に掌握できていなかった俺の能力の繊細、そして、同じく”人間一人”では理解することも出来ない今までの”俺の”体験、知識、記憶が入り込んできた…

…一秒だったのか、一分だったのか、一時間だったのか、それともそれ以上だったのか…

人間”での”貧弱な体ではどれ程経っているのかすらわからない…そんな場所にいながら、俺はずっと痛みに耐え続けていた。不思議と、痛みは時間が経てば経つ程感じなくなっていた。

…そうか、もう”人間”の域を出て、”に戻るのか…

”俺”は自分でも予期せず、いや”もう一人の俺”は予期してそう言った。

しかし、”俺”はそれを認識することなく、

”俺達”はさらに心の深淵に沈んでいった…

第五話（後書き）

どうも、雷龍です。

突然ですが、実はある設定がこの後の話で重要に関わってきますしかし、俺にはそんな設定を全て書く時間がありませんので、今回から、あとがきにてさほど重要でもない設定も含めて説明をさせて頂きます。

また、何かネタや提案、批評がありましたらどうぞ言って下さい。

では、今回は軍の設定の説明です。

まず、階級ですが、上から、

大元帥<<<<元帥

<<最高大将<大将<<中將<少將<准将

<<最高大佐<<大佐<中佐<少佐<准佐

<<最高大尉<大尉<中尉<少尉<准尉

<<軍曹<兵長<兵

となっております。

今回来たのは、上から三番目の最高大将ですね。

（因みに、白鞘由佳里は元帥です）

將軍のなかでも、大将以上は別格とされており、十二大将、三元帥といわれています。

また、大将はそれぞれ五万人程度の小飼の兵が管轄下の兵以外にいます。

（自らを頂点に、下に別個の中将や少将などを置くこともできます。但し、元帥は、大元帥の補佐の役目があるので、自軍は持つことが出来ない。また、現在の統括軍最高大将は、元帥も兼任しているため自軍を持っていない）

また基本的に、准将以上は神でないとなれません。但し、一部例外があります。（それはまたおちおち説明します）
そして、最高大佐は基本的にはヒトが就ける軍のなかでの最高階級です。

足りない部分もありますが、以上が現段階での階級等の説明です。

次は軍の制度の説明です

ラーズセント軍は、統括・陸・海・空の四軍に、大元帥軍とそれぞれの大将が持つ大將軍を加えた、六軍で構成されています。

また、四軍はそれぞれ三つに分かれ、総勢十二人の大将がいます。

（BL A H風に言くと、大元帥軍が零番隊、統括・陸・海・空軍は護廷十三隊みたいな感じ）

大将の地位には、三つの位があり、上から

最高大将（所属軍総司令官、同軍最高責任者）

-（一級）大将（所属軍副総司令官、同軍中央参謀本部本部長）

-（二級）大将（所属軍副総司令官、同軍中央参謀本部副本部長）

となっており、それぞれの地位の大将達を統括軍の大将が纏めています。

以上が軍の制度の説明です。

指揮系統の説明はまた今度します。

説明を思い付いたかたは、有難いご意見をお聞かせください。

では、雷龍でした。

第六話（前書き）

何か満足できない出来です。後々修正するかも。

（部屋の描写で、図を入力しようとしたけど、無理でした。

やっぱりスマートフォンだからか？）

第六話

第六話

「……フェイス！仕事なんだから一回離れる！」
「えー！嫌だ嫌だ嫌だ！クレルドと一緒にいたい

」！！！！」

…あれ、此処は何処だ…？

てかなんで座ってんだ！？

…あ！こいつはさっきのフェイスとかいう女！何で俺にくっついてんだ？離れる！

…ん？、体が動かない！

言葉も話せないし……ん？

…俺こんなに座高高かつたっけ？

そう、彼の身長は175？で座高は80？なのだが、少なくとも10？はいつもより視点が高い

うーん？さっきまで、中庭にいたよな？何でこんな場所にいるんだ？全く分からん…

因みに今、真がいる部屋は何処かにある誰かの執務室兼研究室兼応接室だ

その執務室の中央には、コの字形の執務机が備え付けており、椅子に丁度座ったとき、

正面の両開きの豪華なドアを見据えることができるように置かれて

「まあまあ、そう騒ぐな。俺がわかる範囲でお前の質問に答えてやるからさ、…もう騒ぐなよ…」

「……………！ あ、ああ、わかった…」

その突然現れたら俺（？）にそっくりな男に俺は興奮し、必死に尋ねた。

しかし、男は俺のことを咎め、まるで拷問にかけられていた方がいいと感じられるほどの

恐ろしいまでの冷却効果のある冷凍室に入れられたかのような視線を、

周囲360度から発せられて、無理やり俺の興奮は抑え込まれた…

「ふー… やつと話せるな。さて、まず何が聞きたい？…と言っても、既に俺に聞いてるか…」

じゃあ、まず最初の質問に答えるが俺はお前自身だ。」

「…は？」

俺がこんな間抜けな声を出したのは仕方がないだろう。いやいや、まず理解出来ないだろ？

俺がお前？ そんな規格外のイケメンに俺はなつたつもりはない。

「うーん… まあ、確かに理解できないよな？俺がお前ってというのは

…

…そうだな、詳しくいうと実質的にはお前はこの姿の俺が変質した存在だ。

お前の本来の姿であるこの俺の記憶喪失… それに加えてその他の様々な現象により、俺の体が自己防衛反応を起こした。

それによる、新たな人格の形成、人間たちに紛れるための神格の急激な下落、それに伴った新たな体の形成、またその体にあう能力以外の能力の使用不可…

それにより、生まれたのがお前… 龍谷

真だ」

「…は？それって… つ、つまり、俺はただの、あんた… いや本来の

俺の復活するまでのスペアって…こと…か…？」

…絶望した…

だってそうだろ？今までの俺は、ただ本当の俺が復活するまでの”予備”だったと思っただから…

更に、ネガティブな方向に気持ちが向こうと俺はしていた… しか
し…

「いや、それは違う。言っただろう？お前は本来の姿である俺が”変質”した存在であると。

別にお前はスペアではない。内面上は、少し能力が欠如しているが、お前は俺と何ら変わらない、全く同じ存在だ

それに、俺だけが復活するわけではない。お前の人格は、俺の人格を真似ただけだからな…

簡単に人格を融合出来るから、二人の人格や、記憶などを全て合わせて一人になったときに復活すれば、
実質、二人で一緒に復活出来る」

「……………よっしゃあああああ！！！！！！」

嬉しすぎて、つい今までの人生で二番目にデカイ声を出してしまっ
た。

因みに、一番目は生徒指導室で ピーーーーー（超卑猥的発言のため、自主規制）を見たときだな。

あの時は、ダッシュで逃げた。

あ、本当の俺が苦笑しながらこっち見てる。

…いきなり大声出して、恥ずかしい…

俺は後で聞くと、この時死にそうな顔をしていたという。

第七話（前書き）

物凄い短い上にggggで全然面白くないです。ご注意ください。

あと、PV8000！ユニーク4000！

更新も全然無いのに、本当にありがとうございます！

これからもよければ、よろしく願います！

第七話

第七話

「…落ち着いたか？もう続きを話していいよな？」

「ああ…（恥ずかしい…）」

恥ずかし過ぎる行動をした後の、死にそうな程の羞恥心からやっと抜け出した俺は、

少し声が小さいながらも話すことが出来るまで回復していた。

「次の質問だが、確か これはどういうことだ、だったな。」

「そうだ」

「さっき説明した時に、お前は自分が俺のスペアっていうふうに間違っ
てて解釈した

ショックで覚えてないかもしれないが、俺はあの時”神格の急激な
下落”と言っただ。…これがどういう意味分かるか？」

「神格しんかくつつつたら、神様の格つてことか、神様になるための資格つ
てことだろ？それがどうしたのか？」

「わからないのか？…神格を持っているってことは、つまり神、も
しくは神に準ずる者だということはわかるな？」

「まあ、それぐらいはな…」

「じゃあ、その神格が下落していたのは、誰だ？」

「え？あんただろ？それがどうした？」

「…分かってて、ボケてるんだよな？」

「は？何が？」

「ハア… お前の頭が心配だ…」

…俺が神格を落としたってことは、俺は神だつてことだ。

で、俺とお前は全く同じ存在だから、お前も神だつてことだ。」

「…え？…俺が…神…様？」

「ああ、それも、全ての世界の神を束ねる最高神だ。しかもお前と俺は、ぬそのなかでも一番殺傷能力、演算処理速度、発言の影響力が最も強く、最も速い、

”創造”と”破壊”と”統括”と”管理”と”服従”と”虚無”と”全て”を司る、最高神、序列第一位。

神階級、最高位第三十三階位神。グレナルド・フェル・クレイフィールド・ゼロニウス・ヴァンフォート・ダーディングだ。

長いから、クレイフィールドはクレルドにしてるがな。あ、因みに神名はゼロニウスだ。」

「……………はあ？」

……………俺が神……？しかも最高神……？

……………そんな馬鹿なことがあるかあああああああ！！！！！！」

半狂乱したの、仕方がないよな？

イヤ、だっていきなりお前は神だって言われたら、信じるわけないだろ？

第一、それを聞いて一番あり得る反応が、頭大丈夫か？と言って精神病院に連れていかれるほどのアホな発言を信じるか？

第一、俺は無神論者だ。神なんて居ないと今までずっと思ってたからな。

……いや、まあ、もうなんか半分信じてるけどさ……

だってそうだろ？死んだ方が良くくらいに感じる殺気が目の前の人から出されてたら、少しは信じないと……

「……全く……うるさいぞ……少しは静かにしろ……。はあ……じゃあ、お前は何で雷を操れんだ？何で霊と話せるんだ？……自身が神である他に理由が思い付くか？明らかに人外の力だろうが……」

「はい…すみません… 確かにそうですね…俺は神です。確かに、最高神です…」

俺はそういつて平伏して謝りながら肯定した。

…あれ？これって旗から見れば、頭のおかしい人だよな？…

「…そうだな」

…最悪だー！ー！！！！

何か訳がわからないことを口走ってしまったー！！！！

恥ずかしすぎてもう死にたい…おい、俺を穴に埋めてくれ…

「しかし断る。」

「何故だ！？早くこの恥ずかしい醜態をさらした俺を埋めて抹殺してくれ！！」

「どうやって実体がないのに埋めるんだ。」

「…それもそうだな… …ん…？…実体がない？」

「丁度良いから説明…しようと思ったんだが、どうやら時間のようだな。」

フェイスが俺のことを起こそうとしている。…俺達の伴侶であるフェイスを頼んだぞ…

また会おう… 能力の移譲はしておく。

頑張って元の俺に戻ってくれ。」

「いや、ちよつと待て！まだ話が…」

俺はまだ聞きたいことがあったのだが、前のイケメンさんはそんなことは全く気にしないのか、勝手に消えていった。

意識が完全に消える前に俺が思ったのはただひとつ…

人の話はちゃんと最後まで聞こうぜ!?

第七話（後書き）

人の話はちゃんと最後まで聞かないと人に嫌われますw（神の常識にはないw）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2744t/>

(現在、改稿中)世界の全ては神すらも知らない

2011年9月12日22時19分発行